

朴泳孝の『建白書』に於ける独立論

康 明 豪

はじめに

1. 思想形成
2. 「保民護国」
3. 「新民」

おわりに

キーワード：朝鮮近代、朴泳孝、福沢諭吉、
「独立」、『建白書』、民権論

はじめに

「朝鮮国内政ニ関スル朴泳孝建白書」（以下『建白書』と略す）は、朴泳孝によって一八八八年二月二十四日に甲申事変失敗後日本亡命中に著されたとされる⁽¹⁾。この『建白書』には朝鮮独立のための具体的な方法論が提示されており、朴泳孝の思想及び開化思想を考察する上で、重要な史料の一つである。

現在までの朴泳孝の『建白書』に関する研究は、富国強兵、政治改革や外交論⁽²⁾など様々な観点から研究がなされてきたが、朴泳孝は日

本で福沢諭吉と交流しており、その思想的関連性も注目されているが、その研究は殆どなされていない状況である。その中、青木功一氏が朴泳孝の『建白書』と福沢諭吉の著作を比較検討し、福沢諭吉の著作の影響を指摘しており⁽³⁾、これについては大いに首肯できるところであるが、しかし、『建白書』における朴泳孝の思想を理解するためには、『建白書』の内容分析と共に福沢諭吉の思想との関連性を検討する必要があると思われる。

本稿に於いては、以上のような点を踏まえながら『建白書』に於ける朝鮮独立論の具体像を探り、またかかる朴泳孝の独立論と福沢諭吉の独立論とのかかわりにも注目しながら検討していきたい。

1. 思想形成

朴泳孝（一八六一～一九三九）は一八六一年水原で進士朴元陽の三男として生まれ、母は全州李氏であり、朴泳教はその伯兄である。

(1) 朴泳孝の『建白書』（上疏文）は幾つかの写本が存在するが、田鳳徳氏は、①日本外交文書本 ②岡本稿本 ③新東亜附録本 ④姜在彦本 ⑤韓国史料選集本を各々比較して掲載しているが（田鳳徳「朴泳孝とその上疏研究序説」『東洋学』8巻、1978、175～236ページ）、本稿に於いては日本外交文書本（「朝鮮国内政ニ関スル朴泳孝建白書」外務省編『日本外交文書』第21巻、日本国際連合協会、1949、292～311ページ）を参考にした。

(2) 青木功一「朴泳孝の民本主義・新民論・民族革命

論（一）—「興復上疏」に於ける変法開化論の性格—」『朝鮮学報』80輯、朝鮮学会天理大学出版部、1976、崔徳壽「朴泳孝の内政改革論及び外交論研究」『民族文化研究』21号、高麗大学校民族文化研究所、1988、金顯哲「朴泳孝の政治思想に関する研究—『国政改革に関する建白書』に現れた富国強兵論—」『軍史』34号、国防軍史研究所、1997。

(3) 青木功一「朝鮮開化思想と福沢諭吉の著作—朴泳孝「上疏」における福沢著作の影響—」『朝鮮学報』第52輯、朝鮮学会、1969。

十一歳のときには前国王哲宗の四女永恵翁主と結婚し、錦陵尉という官職が与えられ、その後一八七八年に五衛都總府都總管、翌年に惠民署提調、一八八一年には義禁府判義禁に任命され、中央政界へ進出することになる。

この時期には丙寅洋擾（一八六六）、辛未洋擾（一八七一）など西洋列強による朝鮮への進出、そして日本との江華島条約の締結（一八七六）による朝鮮の開国が行われ、朝鮮内では外圧に対する危機意識が高まり、衛政斥邪思想、開化思想などが現れた。

開化思想は朝鮮の独立の危機を克服するための思想として現れたが、最初は呉慶錫、劉鴻基、朴珪寿によって形成され、とりわけ実学の中で商工業の発展を目指す利用厚生学派の中心人物である朴趾源の孫であり、利用厚生学派の実学の学風を受け継いだ朴珪寿は、一八六一、一八七二年に使節団の副使と正使として清を訪れ、危機が迫った清の時勢を見、そして呉慶錫と共に清で刊行された西洋の文物を紹介する新書である『海國圖志』『瀛環志略』等を購入して読むことで海外の新知識を吸収していた。朴泳孝、金玉均、洪英植、徐光範、兪吉濬などの青年らは朴珪寿宅の舎廊に集まり、出入していたが、朴珪寿は青年らに朴趾源の『燕巖集』を講義しながら、国際情勢に関する知識や情報を吸収させた。朴泳孝も回顧談の中で「その新思想は私の一家の朴珪寿の家の舎廊において生まれ出た。金玉均、洪英植、徐光範、そして私の伯兄（筆者曰 伯兄というのは泳教である）と共に齊洞 朴珪寿の家の舎廊に集まった。」と述べ、また「燕巖集の中で貴族を攻撃する文章から平等思想を得た。」⁽⁴⁾と述懐し、その新思想とは平等論、民権論であると述べている。そ

の平等論、民権論は、内には民権の伸張、外には外国からの朝鮮の独立を意味するが、こうした思想は後の甲申事変の政綱とその後の『建白書』に受け継がれている。

朴珪寿の没後朴泳孝は、通訳官として清に数回往來し、西洋の近代文物と科学技術が紹介された『海國圖志』、『瀛環志略』、『博物新編』などの書籍を持って帰り、新知識を普及させていた中人出身の呉慶錫と、また中人出身の漢医者で仏教信者である劉鴻基から開化思想の指導を受けた。

そして僧李東仁、卓挺植も劉鴻基から仏教思想、開化思想の影響を受け、開化派に加わることになるが、その後李東仁は日本から持ち込んだ『万国史記』や地理、化学、物理などの書籍を朴泳孝など開化派に紹介し、朴泳孝は李東仁を介して福沢諭吉とも交流に至るのである。朝鮮留學生の慶應義塾入学、福沢門下の牛場草蔵と井上角五郎等の朝鮮行、金玉均、朴泳孝の交詢社参加⁽⁵⁾などは朴泳孝等開化派と福沢諭吉との交流を窺わせる例であり、さらに朴泳孝の日本見聞日記の「使和記略」には、朴裕宏、朴命和の慶應義塾への留学、修信使と福沢諭吉との別れの挨拶の内容が描かれており⁽⁶⁾、また、福沢諭吉の手紙からも朴泳孝に関する様子をみることができる。⁽⁷⁾

以上のように朴泳孝は、朴珪寿、呉慶錫、劉鴻基から実学主義と開化思想、つまり平等論、民権論に関心を持つようになり、それが福沢諭吉との出会い・交友により福沢諭吉の独立論を受容し、さらに深化されていくのである。

(4) 李光洙「朴泳孝氏に会ったときの話—甲申事変回顧談」『東光』第19号、東光社、1931、14ページ。

(5) 交詢社『交詢雑誌』第146号（明治17. 3. 25）、『交詢雑誌』第307号（明治21. 9. 15）

(6) 朴泳孝「使和記略」壬午年11月3日條、11月16日

條。

(7) 明治16年7月1日付井上角五郎宛、明治29年6月14日付村井保個宛（慶應義塾編『福沢諭吉の手紙』岩波書店、2004年4月、184、230ページ）。

2. 「保民護国」

前述したように、朴泳孝は開化派の形成期に於いて平等論、民権論に関心を示していたが、一八八二年壬午事変後は修信使として日本に派遣され、日本滞在間は福沢諭吉と交流し、牛場卓蔵、高橋正信、井上角五郎などの門下生と同行して帰国した後は漢城府に治道、警巡、博文等の三局を設置し、とりわけ人民の教育、啓蒙のための新聞刊行の事業に乗り出すなどこの時期の修信使の日本訪問を機として朝鮮の民権伸張という意識が形成されたと思われる。かかる意識が表面化し、外の世界へ表出されたものが、甲申事変後発表された革新政綱十四カ条であり、その中の「閉止門閥 以制人民平等之権

以人扱官 勿以官扱人事」や「革改通国地租之法 杜吏奸而叙民困 兼裕国用事」⁽⁸⁾という項目が、まさにそれにあたる。民権論への傾倒は、閔氏一族による要職の独占と朝鮮の支配イデオロギーに基づく門閥制度、身分制社会からの脱皮を意味するものであった。

平等権の制定等権利や法律の改革による人民の民権論を展開してきた朴泳孝は、さらに人民の立場からそれを一層深化させ、そしてその思想が具体的に描出されたものが、一八八八年二月二十四日日本で著された『建白書』である。『建白書』の内容上の構成は、総論的な前文と各論八項目及び具体策となっており、まずその各論の八項目のタイトルを列記してみたい。そうすることで朴泳孝の『建白書』に於いての基本観点を窺うことができるからである。

- 一曰、宇内之形勢……①
- 二曰、興法紀安民国……②
- 三曰、経済以潤民国……③
- 四曰、養生以健殖人民……④

五曰、治武備、保民護国……⑤

六曰、教民才徳文芸以治本……⑥

七曰、正政治、使民国有定……⑦

八曰、使民得当分之自由、以養元氣……⑧

この内容を順次にみると ①では世界の情勢を述べており、②～⑧までは法律と紀律を興して民と国の安全を保すること、経済によって民と国を潤すこと、人民の身を健やかにすること、軍備によって民を保ち国を守ること、民に才徳・文芸を教えること、政治を正し民と国の安定をはかること、民に自由を与え元気づけること、が概ねの内容である。斯かる『建白書』のタイトルには二つの朴泳孝の観点が提示されていると思われる。まず②、③、⑤、⑦は改革の方法論として法律、経済、軍事、政治の改革による人民と国の安定を説き（「保民護国」）、④、⑥、⑧は人民各々備えるべきものとして健康、才徳・文芸、自由（精神）が挙げられており、人民の一身に重きを置く人民像が提示されている（「新民」）。

以上のような「建白書」のタイトルから推察すると、朴泳孝の論点は「保民護国」論と「新民」論であり、民権論としての独立論といえる。

では、まず「保民護国」論について検討したい。朴泳孝は「宇内之形勢」の中で、世界の情勢を「昔之戦国」のような弱肉強食の時代と認識し、西勢東漸の危機から「自立自存之力」の保持の必要性を力説しているが、「未開弱小之邦」の朝鮮が独立のために、まず目を向けているのが、欧米などの「文明強大之国」である。朴泳孝の文明観の捉え方、思惟の基本認識を理解するために、以下では諸国についての関連内容を引いておく。

〔i〕「（前略）故明此理者、勉耕作、勤工業、勵牧畜、務漁獵、普通四海、而無游民、土地雖

（8）「甲申日録」韓国学文献研究所編『金玉均全集』、ソ

ウル亜細亜文化社、1979、95 ページ。

少、人民繁多、而命亦長寿、此人民有識而百具殷富之所致、美、英、德等国皆然」・・・（三曰、經濟以潤民国）

〔ii〕「日本自数十年前、廢酷刑施衛生之法、以來其人口之繁盛、可謂隆盛也」・・・（四曰、養生以健殖人民）

〔iii〕「（前略）故文明之邦、雖繫獄之囚徒、亦於獄中說教而導之、使之改過遷善、豈非善之善哉」・・・（六曰、教民才德文芸以治本）

〔iv〕「然則為政府謀者、不得不使人民得當分之自由、以養浩然之氣、不可以苛政悖俗、以害其通義、故美政府、以禁奴之事、為大戰遂禁之、天下亦隨之而禁、豈不美哉、豈不偉哉」・・・（八曰、使民得當分之自由、以養元氣）

以上の内容をまとめてみると〔i〕は米国、英国、独逸などの人民の識見の高さとそれによる人民の人口の増加と寿命の延び 〔ii〕は日本の酷い刑罰の廃止と人口の増加 〔iii〕は文明国の獄での囚人の教化 〔iv〕は米国の奴隷の禁止について論じられており、これらの内容に共通しているのは諸国に於ける人民の民権伸張の動きが描出されている点である。「野蛮」、「半開」から「文明」への発展、つまり朝鮮の独立の確保は人民の民権伸張いかにによるものであった。

「文明強大之國」からの文明の摂取による国家的独立が当面の課題であるが、それは朝鮮の実践的で現実的問題として規定される。

朴泳孝は「一曰、宇内之形勢」の中で、アジアと欧米とを比較して次のように語っている。「臣按亞州、天下靈氣所藪之處也、故儒、仏、耶蘇、及回々教之祖、皆出於此土、古昔盛時、非不文明、然至于近代、却讓歐州者何也、蓋諸邦之政府、視民如奴隸、不導之以仁義礼智、教之以文学才芸、故人民蠢愚無恥、雖見領於他、而不知為恥、禍乱将至、而不能覺、此政府之過也、

非人民之過也」⁽⁹⁾ 近代に入ってアジアが欧米に後れた理由を、政府による人民の奴隷化と、それによる人民の無教育にあると指摘している。以上のように朴泳孝の主眼が、欧米の先進的な制度や組織、物質文明ではなく、被支配階級である人民に置かれていることがわかる。

「（前略）同馳、而我尚在蒙昧之中、如痴如愚、如醉如狂、不弁世界之事、而自取侮辱於天下、此無恥之甚也、臣雖不學無識、昧於世事、然恥之憂之者、以天下之人目我朝鮮為癡愚醉狂之國也、苟有心者、孰不恥」（前文）

「此亞州東部興亡盛衰之秋、而我同族奮起排難之時也、然我亞州之族、懶惰無恥、苟々偷生、絶無果敢之氣、是臣所以寒心歎息者也」（一曰、宇内之形勢）

「未開」から「開明」の域に達することが目標であるが、しかし、依然として朝鮮は「癡愚醉狂之國」であり、人民は「懶惰無恥」である。そして朴泳孝は、かかる人民の気風の原因を、人民を奴隷視する圧政的政治に求め、専制君主制の批判へ結び付けていく。その批判の対象としているのは、専制君主制そのものよりは絶対的権力による被治者への抑圧である。「凡民有自由之權、而君權有定、則民国永安、然民無自由之權而君權無限、則雖有暫時強盛之日、然不久而衰亡」⁽¹⁰⁾ 被治者たる人民の自由と権利、いわば民権の拡張のためには君主権は制限されるべきであり、不可分の関係として把握されている。

そして民権の伸張と関連して、朴泳孝が持ち出しているのが天賦人權論である。「天降生民、億兆皆同一、而稟有所不可動之通義、其通義者、人之自保生命、救自由、希幸福是也、此他人之所不可如何也」⁽¹¹⁾ 人間は生まれながらにしてすべて平等であり、一定の譲り渡すことのできない権利を与えられていること、これらの

（9）「朝鮮国内政ニ関スル朴泳孝建白書」297 ページ。

（10）同前、309 ページ。

（11）同前、309 ページ。

権利のうちには、生命・自由・幸福の追求が含まれている。朴泳孝の民権論の根底にあるものは平等論であり、それは以前の『漢城旬報』⁽¹²⁾、甲申事変の革新政綱や金玉均の上疏文⁽¹³⁾からも窺うことができ、開化派、とくに急進開化派（会議党）⁽¹⁴⁾の思想の特徴といえる。

朴泳孝にとって政治における「保民」論は、専制君主制乃至身分制下の枠から人民を枠外の世界へ取り出し、天賦人權論を媒介して人民を保つことである。また、かかる意味に於いて「民」は単なる民本、為民という朱子学的政治論とは区別されるものであり、政治的客体から政治的主体への転換を意味するものでもある。

また、朴泳孝は『建白書』において法律の分野に改革を求めている。「法律者、人民処身結交之規矩、而勸正理、禁邪惡、故其行之也、無偏無党、只弁是非曲直之理、而治之、有罪則雖貴必罰、雖愛必刑、無罪則雖賤不可抑、雖憎不可迫、云小兒、云大人、云貧賤、云富貴、其身命一也」⁽¹⁵⁾ここでは法律の意義を説明しながら法の適用の公平性を主張する、所謂法治主義が説かれているが、その論旨の本質は法治主義といった理論の説明や紹介にあるのではなく、甲申事変以前から急進開化派の主な関心事である朝鮮の封建的身分差別と支配階級の恣意的な支配による人民の抑圧を排斥し、人民の民権を保障することであった。かかる認識下に具体策として提示されているのが、寡婦の再嫁の許容、班・常・中・庶間の婚姻の許容、身分にかかわらぬ人材の登用などである。このようにみると、政治の場合と同じく、「保民」としての民権論が展開されており、そこからは官僚・両

班中心社会から人民社会への移行という朴泳孝の目標を垣間見ることができる。

以上のような観点から次のくだりをみると、一層理解しうると思われる。「政府収民之税、宜孜孜汲々、以保民護国為本、而用之官禄、治安、軍務、榮繕、衛生、教育、救窮等、及褒賞有功、則可也、然法令苛刻而害民之通義、防禦失策、而致国之恥辱、興無義之軍、而窘迫百姓、忽癘疫之行、而伝染四方、無心教育、而人民固陋、不顧四窮、而転乎丘壑、禄無庸之官、賞無功之人、興無益之土木、而費公財、此盜民之財、竭民之力、不可謂政府也、夫人民出税奉公之本志、欲保身家之幸安也。」⁽¹⁶⁾これは経済における租税と関連して政府の役割について述べられているところであるが、その根本は「保民護国」であるとし、「民之力」と関連して人民の通議の保護と国防の任務、衛生の徹底、教育の実施、福祉のサービス、公正な考課、健全な財政運営などが記されている。朴泳孝の主な関心が諸分野における「民之力」の向上にあることがわかる。また、例文から注目したいのは、人民の納税の意義を「一身一家の幸福と安寧」にあるとし、視点が個々の人民にむけられている点である。このような人民の「個」への注視は、『建白書』の本文のタイトル④、⑥、⑧からも推測できるように、「保民」論と共に朴泳孝の思想の一端をなしていると思われる。

3. 「新民」

朴泳孝は、治者に対する被治者の立場から民権論としての「保民」論を展開しているが、一

(12)『漢城旬報』10号。

(13)「池運永事件糾弾上疏文」韓国学文献研究所編、前掲書、147ページ。

(14)現在金玉均、朴泳孝、徐光範、洪英植などの開化派を急進開化派、初期開化派、開化党、独立党などと称しているが、明治17年12月22日付の『時事新報』の記事をみると、「朴泳孝、金玉均、洪英植、徐光範、劉

鴻基の人々は豫て朝鮮の独立を謀りしものにて日本人は之を独立党又は日本党と呼べども朝鮮にては一般に會議党と名く」となっており、当時朝鮮では會議党と呼んでいたことがわかる。

(15)「朝鮮国内政ニ関スル朴泳孝建白書」297ページ。

(16)同前、299～300ページ。

方で、その視線は個々の人民の領域に向けられており、人民の個体化は朱子学的人間観の否定を意味し、近代的な人間象が窺える。

朴泳孝は「六曰、教民才徳文芸以治本」の中で、人民の自由と関連して「(前略) 是以誠欲期一国之富強、而与万国対峙、不若少減君権、使民得当分之自由、而各負報国之責、然後漸進文明也、夫如此、則民安国泰、而宗社君位、並可以永久也」⁽¹⁷⁾と語り、一国の独立には君権の縮小とそして人民個々の「当分の自由」と報国の責務が重要であると論じている。一身に於ける民権(「当分の自由」と報国の責務)が一国の独立の前提条件となっているのである。また、「八曰、使民得当分之自由、以養元氣」の中でも次のように述べている。「凡人性懶惰、好因循姑息、故以因循姑息之意、見旧来之政府、則似難以一朝輕率之挙、變動之、然若至不得保一身之安穩、不得為一身之自由、不得保私有之財物、失人生之大義、不可姑息之地、則必動之以自由保、其孰能禦之、故美因英之苛政、而動之、遂成自由之邦」⁽¹⁸⁾ 欧米の自由の精神を意識しながら人生の大義は「一身之安穩」、「一身之自由」、「私有之財物」にあると論じ、視点を個人に定めている。教化の対象の人民から独立した個人への視点移動は、朝鮮の封建的な支配体制下の客体的な存在の人民から自分で判断し自律的に行動する主体的な人民へと変わっていくのを意味し、それは人民の実生活と密接不可分の関係にある。朴泳孝は、人間観についても「凡人之所重者、以衣食住三事為大、無不欲増財致富、給需用、享歡樂(以下省略)」⁽¹⁹⁾と述べ、人間は欲を抑えるべきだという朱子学的人間観を否定し、富と歡樂を追求する存在として描いており、こうした人間の自力と活動によって農、工、商工業などの諸産業は発展し、

結局近代化へ向かうという認識を示していると思われる。

そして朴泳孝は、以上のような自律的人間観と関連して人民に必要なものとして教育、つまり人民の知識の習得を挙げている。「教者猶磁石也、人在大洋、或沙漠之中、雖不能弁南北、然有磁石、則可以弁之故磁石即通四方就文明之要具也」⁽²⁰⁾ このように、教育は人民の自分自身の判断や思慮の是非を弁える文明の道具であり、人民はその知識習得の主体として把握されている。ちなみに人民各々の習得すべき知識としては基本的に才徳・文芸が挙げられているが、とりわけ重要視されているのが朱子学下の実学ではなく、西洋自然科学のような実用の学(窮理、發明の学)である。

「一身の独立」のためには知識の習得は肝心な要素であるが、人民は知識を習得し、一身の健康の維持にも努めなければならない。「(前略) 其所以然者何也、一是不学無識、一是博学多識、不学無識、則無遠慮、任天然之性而行之、与孩兒無異、博学多識、則達事理、故能究天地之奥意、而發明益民養生之道以節天然之性而衛之(以下省略)」⁽²¹⁾ 知識習得の目的の一つとして健康が言及されているが、知識は一身の精神的乃至肉体的健康を増進させる道具といえる。『建白書』の内容から推察すると、朴泳孝の人民の健康の重要性の訴えは、支配権力からの人民の権利保護、基本的人権という観点からであり、主体的な存在としての人民の一身の健康は、文明の進歩のためにも不可欠なものであるのである。

朴泳孝は、身分制に基づく不条理な封建制を否定し、「当分の自由」を説き、生活世界に於いては財産の獲得と所有の主体としての「個人」と科学(知識)としての実学に力点を置いてお

(17) 同前、306 ページ。

(18) 同前、309 ページ。

(19) 同前、298～299 ページ。

(20) 同前、305 ページ。

(21) 同前、302 ページ。

り、こうした近代的人間こそが「新民」であろう。

また、前述のごとく福沢諭吉との思想面での関連性からその類似性を求めるならば、封建的束縛から個人を切り離し、「一身の独立」を実現する独立論にあるであろう。因みに福沢諭吉は人民の「独立」のために備えるべきものとして、智力、財力、一身の品行私徳の力、身体健康腕力を挙げており⁽²²⁾、朴泳孝のそれと比較すると、注目に値すると思われる。

おわりに

朴泳孝の独立論は、人民個々の民権を説く、いわゆる「新民」論に基づく民権論である。李光洙氏は朴泳孝との対談の中で次のように語っている。「甲申政変は朝鮮を欧米式の新政治思想—自由民権論、今の言葉でいうと、封建からブルジョアへ移る新思想で革新させようとした大運動である。」⁽²³⁾つまり甲申事変を自由民権運動として位置づけ、朴泳孝もこうした認識に同意している。朴泳孝にとって甲申事変は、朝鮮の独立の妨げとなっている朝鮮の身分制、門閥制による人民への束縛、つまり外因によって絶対的に決定されるシステムを非難し、被支配者の人民に焦点をあてて自由、平等等を説く自由民権運動の一環であった。かかる朴泳孝の自由民権論は、甲申事変後の『建白書』にいたっては人民の一身に重きを置き、自立・独立した「個」を説く、言い換えれば人民の権利を主張する民権論ではなく、個々の人民が備えるべき民権論として描き出されている。朴泳孝にとっては富国強兵のための制度的な問題、例えば治道司の設立、郵便局、商社・商会の設立などの殖産興業策、強兵策のための軍事学校の設立、軍法の改定、軍制の統一などは二の次の

問題であった。

以上のような朴泳孝の独立論からは、個人主義的性格も見出されるが、とりわけ福沢諭吉の独立論の影響が窺える。しかし、朴泳孝は福沢諭吉の独立論を自ら消化し、朝鮮の実情に合わせ、それを再構成しようと試みたと思われる。また、朝鮮近代史の観点から同時期に朝鮮独立の危機の対応として現れた衛政斥邪論や東道西器論の論理と比較するならば、朴泳孝の文明開化論が民権論としての人民の「個」に視座を置いている所にその独自性があると思われる。

参考文献

(日本語文献)

- 『時事新報』明治15年3月1日～明治19年12月31日
 慶応義塾『福沢諭吉全集』、岩波書店、1969
 慶応義塾『福沢諭吉の手紙』、岩波文庫、2004
 石河幹明『福沢諭吉傳』（第三巻）岩波書店、1932
 山住正己『福沢諭吉教育論集』、岩波文庫、2001
 丸山眞男著、松沢弘陽編『福沢諭吉の哲学』、2001
 丸山眞男『「文明論之概略」を読む上・中・下』、岩波新書、2001
 飯田鼎『福沢諭吉と自由民権運動』、御茶の水書房、2003
 露口卓也「啓蒙期 福沢諭吉論（上）—明六社との関係を中心に—」『人文学』第143号、1986
 露口卓也「啓蒙期 福沢諭吉論（中）—明六社との関連で—」『人文学』第144号、1987
 露口卓也「啓蒙期 福沢諭吉論（下ノ一）—明六社との関連で—」『人文学』第146号、1988
 露口卓也「啓蒙期 福沢諭吉論（下ノ二）—明

(22) 「通俗民権論」慶応義塾『福沢諭吉全集』第四巻、595 ページ。

(23) 李光洙「朴泳孝氏に会ったときの話—甲申事変回顧談」、前掲書、14 ページ。

六社との関連でー』『人文学』第 161 号、1997
露口卓也「福沢諭吉ーその思考法ー」『日本思想史学』第 31 号、1999

(韓国語文献)

姜萬吉『韓国近代史』、創作と批評社、1985、
187 ～ 195 ページ
愼鏞廈『初期開化思想と甲申事変研究』、知識
産業社、2000

李光麟『開化党研究』、一潮閣、1973
金顯哲「朴泳孝の保民と民権伸張」『政治思想
研究』2、2000
徐載弼「回顧甲申政変」閔泰瑗『甲申政変と金
玉均』、国際文化協会、1947
金栄作「前期開化思想の構造と特質」『国民大
社会科学研究』10、1997